



特100

396

佐々木高綱

~~101~~
~~101~~



始



持100
396



愛劇家へ

二三年前から文壇の中心興味は漸く小説から劇の方面に移つてまわりました。新しい劇！面白い脚本！此聲は現下の文壇に凄まじい絶叫であります。少くとも新しい文學を語り、新しい美術を味はふんとするものは綜合藝術の粹である劇を知らなければなりません。この際我が社はこの要求に應ずるが爲め現文壇新進氣鋭の名作家を網羅し、各編悉く作家の心血を流露せしめた近代脚本(上場出来る)の佳篇を續刊し、近代人の渴を醫せんとする劇界革新の曙光、新文壇の寵児であります。幸に御愛讀を祈ります。

新脚本叢書第五編

佐々木高綱

岡本綺堂著

大正
6. 6. 18
内交

岡本綺堂著

橘さゆめ装

菊半截版六百頁表紙
木版手摺装幀美麗箱入

最新刊

綺堂脚本十種

定價 送料
圓一價定 錢八料送

◀ 本書内容目次 ▶

白虎隊 佐々木高綱
平家蟹 切支丹屋敷
雨夜の曲 入鹿の父
蒙古襲來 阿蘭陀船
新朝顔日記 千葉笑ひ

愛劇家へ面白い脚本をお薦めす
戯曲作家として第一人者 快心の戯
曲十種を集める者 満都の劇場に於て好
る氏獨特の史劇、艶物はまた讀物として無限の興
味を誘ふ。劇の進歩に伴ふ脚本の愛讀者の盛んな
る傾向ある昨今、先づ本書の内容に接せられ脚本
の眞髓に接せられよ。

發兌

東京神田錦町三の六
振替東京八七八七番

平和出版社

佐々木高綱

登場人名

佐々木四郎高綱
高綱の娘薄衣
佐々木小太郎定重
馬飼子之介
子之介の姉おみの

高野の僧 智山
鹿島與一
甲賀六郎
侍女小冬

江州佐々木の庄、佐々木高綱の屋敷。建久元年十二月の午後、晴れたる日なり。
中央より下の方にかけて、大なる庭あり。但舞臺に面せる方は其裏手と知るべし。
中央より少しく上の方には梅の大樹ありて花は白く咲き亂れたり。奥の方には木立
の間に屋敷の建物見ゆ。

佐々木高綱

(佐々木四郎高綱、三十七八歳、梅の樹の下に立ちて馬の洗足するを見てゐる。家來鹿島與一、四十餘歳。甲賀六郎、二十五六歳。同じく馬の左右に立ちて見る。馬飼子之介、二十歳前後の律義なる若者。名馬生月を厩のうしろに牽き出して洗足させてゐる。)

高綱。 けふは好い日和になつた喃。比良の頂に雪は見えても時候は俄に春めいて來たやうぢや。遠近で小鳥が楽しさうに囀づるわ。

與一。 鎌倉殿が初めての御上洛に、斯様な日和つゞきと申すは誠におめでたい儀でござりまゐるな。

六郎。 お先觸れの同勢は最早尾州の熱田まで到着したとか申すことのでござりする。
(高綱は聞かざるものゝ如く、馬の傍に進みて其の平首を軽く叩きなどする。)

高綱。 子之介、よう働くな。

子之介。 はッ。(無言にて洗足させてゐる。)

高綱。 そちが陰陽なく働いて、朝夕に心をつけて養うて呉るゝほどに……。(家來を見かへりて)これ、見い。一時は少しく衰へた馬も、此頃は再び健かに生ひ立つて、毛澤も一入美しうなつたわ。

子之介。(惚々と馬を見る。)よい御馬でござりませす喃。

與一。 よい筈ぢや。これは鎌倉殿が御秘藏の名馬で、世にも聞えたる生月ぢや。そちも定めて存じて居らう。彼の宇治川の合戦に、梶原の磨墨に乗り勝つて、殿が先陣の功名させられたも、一つには此の生月の働さぢやぞ。

六郎。 あの折の有様は思ひ出しても勇ましい喃。名に負ふ宇治の大河には、雪解の水が滔々と漲り落ちて來る。川の向ひには木曾の人数あよ

そ五百餘騎、楯をならべて待ち受けてゐたわ。

奥一。 況て河の底には亂杭を打つて、大綱小綱を張り渡し、馬の足を支へんと巧んである。なみくの者ではよも渡すまじと見てある處へ、殿は生月、梶原は磨墨、黒馬二匹が轡を列べて、平等院の坤、橋の小島が崎よりざんぶくと乗入つた。

高綱。(遮る。) え、珍らしうもない。措け、措け。(馬に對ひて) 喃、生月。彼の宇治川を初めとして、つゞいて一の谷、八島、壇の浦、高綱と生死を共にして、そちも随分働いた喃。が、それも今は昔の夢で、そちも高綱も再び功名をあぐる時節はあるまい。あたらし名馬も飼殺しぢや。(嘆息しつゝ子之介に對ひ) けふは二日、そちが亡父の命日ぢやぞ。もう好い程にして身を淨め、佛前に回向いたせ。

子之介。(はッ。)

高綱。 もうそれで可い。厩へ牽いて繋いで置け。

子之助。 はッ。(馬を牽かんとすれど動かず。) え、何が氣に入らいで拗るのぢや。さあ、行け、行け。叱ッ、叱ッ。

(馬は猶動かず。奥一と六郎も立寄る。)

奥一。 え、どうしたものぢや。叱ッ、叱ッ。

六郎。 さあ、行け、行け。

(三人は無理に牽かんとれば、馬は狂ひて蹴散さんとす。六郎倒る。奥一等は狼狽へ騒ぐ。馬は狂ひて走り行かんとするを高綱は遮りて其の轡を取る。)

高綱。 え、何を狂ふぞ。そちにも氣に入らぬことがあると見ゆるな。

高綱も狂ひたいは山々ぢやが、狂ふたとて藻掻いたとて所詰は無駄な

世の中ぢや。まあ、鎮まれ、鎮まれ。(馬に對つて諭すやうに云ふ。)

奥一。(馬に對つて罵るやうに。)
此の横着者めが……。殿様が直々にお手をかけられたら、この通り、温順くなつて了ふたわ。

(高綱は馬の口を取りて、子之介に渡す。子之介受取りて厩のうしろへ牽きて行く。)

六郎は馬盥など片附ける。)

(高綱の娘薄衣、十六七歳。侍女小冬を連れて、下の方より出づ。)

薄衣。父上様、これにお出でなされましたか。

高綱。日和が好ければ厩に出て、馬に洗足さするを見てゐたのぢや。

薄衣。石山寺參詣の歸り途に、つい其處で旅の御出家様にお逢ひ申しましたれば、お連れ申してまゐりました。

小冬。お見受け申した所が、有がたさうな御出家様。路を急ぐと一旦は

お断りなされましたを、無理に願うて御案内申しました。

高綱。けふは志す佛の命日。よくぞ其處に心が注いた。して、その御

坊は……。

薄衣。(小冬を見かへりて。)早うこれへお通し申しや。

小冬。は、は、は。(引返して去る。)

高綱。(六郎を見かへりて。)女子ばかりの出迎ひは無禮であらう。そちも參つて御案内申せ。

六郎。はッ。(去る。)

高綱。薄衣と奥一は奥へまゐつて、齋をまゐらする用意など致せ。

薄衣。かしこまりました。

(薄衣と奥一は奥へ去る。六郎と小冬は高野の僧智山を案内して出づ。智山は四十

餘歳、旅姿にて笠と杖とを持つ。

高綱。(會釋して)聖には行く手を急がせらるゝとか承はつたに、ようぞ御立寄り下された。毎月二日は佛の命日でござれば、誰に限らず、門前を過ぐる出家を呼び止めて、回向を頼みまゐらすのが家例でござる。

智山。唯今御息女よりも右様の儀を承はつたが、さりとは御奇特のことに存じます。してお身が佐々木殿でござるよな。

高綱。申し後れたれど、それがしは佐々木四郎高綱、何とぞ御見知り置き下されい。

智山。拙僧は高野の山に住む智山と申す者、諸國修行の爲に陸奥へ下り、歸途には鎌倉より伊豆をめぐりて、これより歸山の道中であらう。

高綱。では、東海道を上られたか。

智山。恰も鎌倉の將軍が上洛の道筋とて、宿々は以ての外ほかの混雜こんざつ、われ等のやうな瘦法師やせにふしは此處こゝでも彼處かしこでも追ひ散され、いや散々の目に逢ひ申したよ。はゝゝゝ。

高綱。(打笑みて)それは定めて御迷惑のこと、お察し申した。(六郎を見かへりて)床几しやうぎを持て。

六郎。はッ。

(六郎と小冬は奥に入る。)

高綱。して、鎌倉の同勢には何處らあたりでお逢ひなされた。

智山。熱田の手前で一つになりましたが、彼の同勢は二三日そこに逗留とか承はつたれば、其間にわれ等は通りぬけて、一足先に發足いたしました。が、其行列の華やかさ、實に眼を駭すばかりでござつた。

(高綱耳を傾けて聴く。) 先づ其の人数は四五千騎もござつたか。

(六郎と小冬は床几を持ち来る。高綱は頓にて智山にすゝめよと命じ、おのれも亦床几に腰を下す。六郎と小冬は一禮して去る。)

智山。(床几に腰を下して語りつく。) 將軍は何所におはすか存ぜぬが、先供には北條、梶原、三浦、畠山、後押へには土肥、安達、猶數々の大小名か平家の殘黨に備ふる用心もござらう、諸國に威勢を示す爲でもござらう、何れも甲冑爽かに扮装つて、家々の紋打つたる旗を樹てさせ、小春日和の海道筋を長々と練りゆく光景は、勇ましいとも美々しいとも譬へて申すべきやうはござらぬ。誠に前代未聞との取沙汰、われ等も此年になるまでに、斯様な目ざましい上洛は初めて見申したわ。われ等は出家の身で、うき世のことを免かう申すではなけれども、頼朝

といふ御人は果報めでたくおはすよ喃。

高綱。(獨語のやうに。) それも皆この高綱故ぢや。恩知らずめが...。(罵る。)

智山。 恩知らずとは...。(聞き答める。)

高綱。(苦笑ひして。) いや、これはお聞かせ申しても詮ないことぢや。先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞き下されぬか。今日御回向を頼みまゐらす佛と申すは、わが親戚でも無し、敵でも無し、味方でも無し、罪無くして相果てたる紀之介といふ馬子でござる。

(高綱は眉を皺めて、空を仰ぎつゝ起つて徘徊す。智山は珠數を爪繰ながら聴く。のかけより子之介忍び出で、同じく聴く。)

高綱。(雲時して。) 數ふれば十年以前、治承四年の秋の初め、蛭ヶ小島に於て頼朝が旗を揚ぐるといふ噂、密かに都へも聞えなれば、われ真先に見

參に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人の悲しさには馬も有
 たず。徒歩にて覺束なくも辿り／＼て、八月二日の曉に野洲の河原
 に差蒐ると、まだ明けやらぬ朝霧の間より、雜鞍置いたる馬を追うて
 來る者がござつた。これ幸ひと呼止めて馬を借受け、向ふの岸までは
 渡りしが：：。これより遠き旅をゆくに、馬の足を假らでは不便なり、
 盗みて逃げんと馬を早めて、二三町ばかり駆け抜ければ、馬士は驚さ
 追ひ來りて馬盗人よと罵り騒ぐ。斯くては是非も無し、馬を返さば大
 事の間合ふまじと：：。心を鬼にして：：。

智山。(思はず叫ぶ。)あら、無殘：：。由なき殺生をせられたよな。

高綱。馬を返さんと欺いて、油斷を見すまし：：。(突く眞似をする。雲時の
 沈黙。)斯くしてやう／＼馬を得たれば、無事に伊豆まで乗着けて、同

じ月の十七日には八牧の屋形を攻亡ぼし、源氏再興の基を開く。其後
 のことは申すまでもござらぬ。が、唯不便なるは彼の馬士にて、其名
 を紀之介と申す由、彼の口より聞きたるを手が／＼りに、平家没落の後
 この國中を隈なく詮議したるも容易に相分らず、此頃に至りて栗田の
 里に子之介といふ若者あり。(厩の方を見る。子之介慌て、隠る。)これぞ彼の
 紀之介の忘れ形見と知れたれば、呼び取りて厚く扶持せんと存せしに、
 彼れは他に望無し、おのが生業は馬士なれば、馬飼ならば奉公せんと
 申すに因て、其の云ふがまゝに厩の小者として召仕ひ、今日まで屋敷
 に置きまするが、これだけにて高綱の罪が消えませうか。せめては亡
 人の菩提を弔ふ爲に、月の二日を命日と定め、供養を怠らず營んで居
 りまする。

智山。(うなづきて。)して、其の子之介と申すは何日の頃より當家に身を寄すること、相成りましたな。

高綱。三月ほど以前でござらうか。

智山。恨を捨て、仇に奉公し、勤め振に如才はござらぬか。

高綱。陰陽なく正直に立働いて居ります。

智山。それも亦奇特のこととござる。御佛は恩怨無二と説かせられた。

高綱。恩怨無二……。 (考へて)佛の教を學べば其様に悟られますか。

智山。佛の教を學ばずとも、悟らるゝ者には悟らるゝ道理ぢや。現に彼の子之介とやらも、お身を仇と恨んでは居らぬと申すではござらぬか。

高綱。子之介が高綱を恨まぬは、心から其罪を謝するといふ人の誠に感

じたのではござるまいか。至誠は神を動かすとか承はる。若し我心の誠がなくなれば、彼も飽まで我を恨みませうぞ。天下の人に皆誠があれば、高綱にも不足はござるまいに……。

智山。佐々木殿ほどの勇士にも、何か此世に御不足がござるかよ。

高綱。勇士なればこそ悶ゆる胸を押へて、斯様に生きても居られます。弱い者ならば疾うの昔に、狂ひ死でもして居りませうわ。(衝と起つ。)御坊、何故この世の中には誠なき奴原が跋扈つて、正しき者が虐げらるゝのでござらうな。

智山。(騒がず。) 正法千年、像法千年の世は過ぎて、今は末法の世でござる。それを救はんが爲に、われ等も努めて居るとは知られぬか。

(高綱は考へてゐる。奥より與一出づ。)

奥一。御用意整うて居ります。

高綱。(うなづきて。)さらば、御坊。

奥一。どうぞお通り下さりませ。

智山。(起ち上りて。)御案内お頼み申す。

(奥一は智山を案内して奥に入る。)

高綱。(厩を見かへりて。)子之介は居らぬか。子之介、子之介。

(厩のかげより子之介は着物を着換へて出づ。)

高綱。御坊を佛間へ招じたれば、やがて讀經も始まるであらう。そちも参つて回向いたせ。

子之介。はッ。

(高綱は奥に入る。子之助もついて入らんとする時、下の方より佐々木小太郎定

重、廿餘歳、出づ。)

定重。こりや馬飼の者、叔父上はお宿にごさるか。

子之介。はい。唯今高野の御出家様がお越しなされて、御佛間へ御案内なされました。

定重。あゝ、左様であつたか。御佛事の場所へ妄りに推参も如何。(考へて。)兎もかくも定重まゐりしと申上げて呉りやれ。

子之介。かしてまりました。(奥に入る。)

定重。(獨語。)合點のゆかぬは此頃の叔父上の有様ぢや。鎌倉殿上洛の人数も早や美濃路まで進まれたと聞くに、御出迎ひの用意もなく、素知らぬ顔して日を送らるゝは、抑も如何なる次第であらうか。(奥にて鐘の音聞ゆ。)あゝ、讀經も最早始まつたと見ゆるな。

(奥より薄衣出づ。)

薄衣。小太郎どの、お越しなされましたか。

定重。あゝ、薄衣どの。叔父上は佛間にござるさうな。

薄衣。はい。先づ奥へお通りなされませ。

定重。いや、今日は少しく心も急げば、こゝにて暫時相待ち申さう。

薄衣。では、それへお掛け下さりませ。

(定重は上の方の床几にかゝる。薄衣は梅の樹に凭りて立つ。)

定重。叔父上の御機嫌は此頃何うでござるな。

薄衣。別に斯うといふこともござりませぬが、兎かにお氣が暴々しう

なつて……、瑣細なことにもお憤りなされて……。傍にゐる者もはら

くするやうな。

定重。御病氣とも見えませぬか。

薄衣。御病氣のやうでもござりませぬが……。 (眉を蹙む。)

定重。はて喃。(考へてゐる。)

(奥より高綱出づ。)

高綱。小太郎參つたか。

(定重は起つて床几を譲る。高綱は床几に腰をかける。定重は薄衣にすゝめられて、下の方の床几にかゝる。)

定重。早速でござりませぬが、將軍御上洛の同勢は最早美濃路まで到着と承はる。やがては當國へ進ませらるゝ御日取でござれば、叔父上にも御出迎ひの御用意如何でござりませぬな。 (高綱答へず。定重は其氣色を窺ひて。) 父は昨夜己に出發いたしてござる。 (高綱は猶答へず) 其砌、父

が申しまするには、其方は叔父上の御伴して、今夕刻より續いて出發
いたせと……。

高綱。(不興げに。)兄上が左様申し残されたか。

定重。はッ。

高綱。其方は父の指揮に任せて、行きたくば勝手にゆけ。叔父は忌ぢや。
(定重驚く。)高綱は行かぬぞ。

薄衣。過日からお勸め申して居りまするに、何故御出迎ひはなされませ

ぬ。將軍の御上洛には途中まで御出迎ひ申すが武家の習。喃、小太郎
どの。

定重。鎌倉の將軍頼朝公が初めての御上洛、武藏相摸は申すに及ばず、
海道かいだうの大小名は總て御伴に加はる中に、叔父上ばかりが御不承知とは

……。

高綱。お、不承知ぢやよ。鎌倉の將軍が何ぢや。頼朝が何ぢや。あの
大杜騙おほがたりの大嘘吐おほうそつきめが……。

薄衣。あゝ、もし、うかくと其のやうなこと……。

定重。萬一餘人の耳に入りましたら……。

高綱。おそろしいと申すのか。(冷笑ふ)嘘吐なればこそ嘘吐と云ふたが何
故せ悪い。こりや能う聞け。石橋山の戦ひ敗れて、頼朝めは散々の體裁。
嚙合かみあひに負けた瘦犬やせいぬのやうに、尻尾しつぽをまいて呆々の體で逃げ廻る。暗さ
は暗し、雨はふる。木の根や岩角いはかどに躓つまずいて顛こけつ轉まろびつ、泥どろぶれにな
つて這はひ歩あるく其の醜態みにまは……。わは……。さりとして我われに取とつては譜
代だの主君しゅくんぢや。命いのちを捨すて、も其の難儀なんぎを救すくはねばならぬと、高綱たかつな駈かけ

付けて扶け起し、それがし御名を賜りて防ぎ戦ふ間、君には疾くく落ちさせ給へと云へば、頼朝めは拜まぬばかりに嬉し喜んで、あゝ、わが身代りに立つて呉るゝか、佐々木は日本一の大忠臣ぢや。われ若し生きて天下を取らんには、其の恩賞として日本の半分を分ち取らすぞと、諸人の聞く前で確に誓ふた。

定重。右様の儀は豫て父よりも承はつて居ります。其折に叔父上が御身代りに相立たずば、頼朝公の御運も危かつたかとも存じられまする喃。

高綱。高綱が源頼朝と名乗つて……思へば馬鹿な。大童となつて必死に闘ふ間に、頼朝めは杉山まで逃げ込んだ。高綱も幸ひに命を全うした。つゞいては宇治川先陣の功名、それだけでも二ヶ國三ヶ國の値は

あらう。さて頼朝めは思ひのまゝに世を取つて、天下の大將軍と仰がれながら、命の親の高綱には何程の恩賞を呉れたと思ふぞ。日本の半分は云ふも愚、四半分の又其の半分にも足らぬ捨扶持を呉れたばかりで、おのれは天晴れ主人顔ぢや。征夷大將軍、源氏の棟梁とか勿體らしく名乗る者が、恩を忘れ、約束を破つて濟むと思ふか。

定重。一應御道理ではござりまするが……。(返事に困つてゐる。)

高綱。勿論、高綱も黙つては居らぬ。石橋山の御約束は最早御忘れなされたかと、度々催促に及ぶと雖も、四の五の云うて埒が明かぬ。それに又土肥の、安達の、三浦のと云ふ腰拔共が、賢振つた面をして、其のやうなことを申すは第一に不忠ぢやの、やれ君命には背くなの、長いものには巻かれるのと、理を非に狂げて意見をし居る。(定重を見て)

其方の父なども同じく其の腰拔仲間ぢや。え、馬鹿々々しい。主人は約束に背く大嘘吐、周囲の奴原は佞ひ武士や臆病者、右を見ても左を見ても、疝に障ることばかりが疊つて来るわ。

(高綱立つて梅の枝を捻ぢ折り、落花微塵に引きちぎつて地に投げ付ける。)

定重。 われ、若輩者が押して申上げましたら、定めて御叱りもござりませうが、今も昔も道理ばかりでは濟まぬ世の中でござりまする。たとひ叔父上に十分の道理がござりませうとも、今更鎌倉の將軍を相手取つて、理非を争ふなどは及ばぬこと。何のやうな御不足がござりませうとも、堪忍遊ばすがお家の爲、此度は何とぞそれがしを御伴に連れられて、枉げて國境まで御出迎ひを……。

高綱。 最前も申した通り、行きたくば其方一人で行け。

定重。 くどうも申すやうなれど、お家を大事と思召されて……。

高綱。 え、面倒な。家が何ぢや。高綱が今日限りで家を捨てたら何とする。

薄衣。 え、もし、父上様……。(思はず絶らんとす。)

高綱。(じつと娘の顔を見たが、又突き退ける。) こんな馬鹿々々しい世の中に、生きてゐる奴の氣が知れぬわ。

定重。 では、何うあつても御出迎ひには……。

高綱。 まだ判らぬか。くどい奴ぢや喃。

(高綱は奥に入る。後に二人は顔を見合せる。)

薄衣。 今更ならねど父上の烈しい御氣性、一旦斯うと云ひ出されたら、容易に思ひ返しはなされまい。困つたことでござりまする喃。

定重。此のたびの將軍御上洛には海道筋の大小名、いづれも人數を引連れて、路次の警固を仕つれとあるに、叔父上のみ御不參と有之つては後日の御咎は逃れまい。況して將軍の御側には、日頃より佐々木一家とは仲違ひの梶原父子も控えて居れば、この機に乗じて如何なる讒言を申立てんも測られず、油断せば家の大事……。 (思案して) 兎も角も一旦は立歸り、出發の用意を整へて、再びお迎ひにまゐるでござらう。

薄衣。若し父上が飽までも御不承知と仰せられたら……。

定重。是非に及ばず、それがし一人にて參るまでぢや。萬一叔父上が御不興を蒙るとも、それがし父子が申し宥めて、無事を計るが一族の好誼……。 (詞優しく) 必ず御心配あるな。

薄衣。何とぞ宜しく頼みまする。

定重。さらば重ねて……薄衣どの。

薄衣。御出發の折には今一度。

定重。無駄とは思へども誘ひにまゐらう。

(二人は會釋して、定重は下の方に入る。薄衣は後を見送りて思案顔に佇立みしがこれも思ひ直して奥に入る。下の方より子之介の姉おみの、廿二三歳の農家の娘、旅姿にて出づ。)

おみの。(四邊を窺ひて。) 子之介は既にゐると御門で教へられたが、はて何處へ行つたことであらう。

(奥より子之介出づ。)

おみの。あゝ、弟……。

子之介。姉様か。(懐しげに寄る。) よう尋ねて来て下された。

おみの。此頃は時候も追々に寒うなつて來たが、別に變る事も無いかや。

子之介。はい。幸ひに達者で暮して居ります。

おみの。それで妾も安心しました。

子之介。けふは月こそ違へ、父様の御命日で、今まで奥で御回向をして來ました。

おみの。奥で……。 (考へて。) そなた一人で御回向をしてゐやつたのか。

子之介。殿様と御一所に……。

おみの。殿様も御一所に……。人間一人を憐たらしう殺して置いて、回向

さへすれば、罪が消ゆるか喃。(冷笑ふ。)

子之介。(愁はしげに。) 姉様。お前は矢つ張り殿様を恨んでゐるのぢやな。

おみの。(左右を見廻す。) これ、そこらに人は居ぬか。(子之介うなづく。) 恨むが

無理か、積つても見やれ。父様は正直律義のお生れで、日頃から露ほ

ども曲つた事はせられなんだに、善い人にも悪い報が來る。十年以前

野洲の河原で何者にか切殺され、牽いてゐた馬は盜まれた。其時わた

しは未だ十三、そなたは十一で碌々に物心も付かず、唯おろくと途方

に暮れて、姉弟手を取つて泣いてゐた。(涙を拭ふ。子之介も俯向いて聴く。)

仇は誰か知らねども、見附次第に唯は置くまいと、歎きの中にも胸に

刻んで今まで月日を送る内に、神佛の引合せか、仇は知れた……。 (再

び左右を窺ひて。) 仇は佐々木高綱と己の口から名乗つて來た。

子之介。十年以前野洲の河原で馬士を殺したは我が仕業と、あからさまに

名乗つて出て、由縁の者を探し求め、昔の罪を償ふ爲に、厚く扶持し

て取らせると、御領主様からお觸が出た時には、夢かとはかりに驚き

ました。

おみの。驚きと悲みと喜びとが一つになつて、一旦は思案にも惑ふたが、
 仇が我から名乗つて出たこそ幸ひ。その屋敷へ入り込んで、隙もあら
 ば恨の刃を、仇の胸に刺し透さうと、約束したを忘れはせまい。こゝ
 へ奉公住して足かけ三月の間に、討つべき隙は無かつたか。其のたよ
 りが聞きたさに、今日はわざ／＼尋ねて來ました。

子之介。隙もあらば仇を討たうと、刃を呑んで住み込みましたが、飽まで
 も前非を悔むた佐々木どの、この子之介の前で兩手を突いて、免して
 呉れとお詫びなされた。其の真心が面にあらはれて……。

おみの。討つべき心も鈍つたか。え、云甲斐のない卑怯者、臆病者……。
 最前も云ふ通り、罪もない人間一人を殺して置いて、詫びて濟まうか
 回向して濟まうか。それで堪忍がなるほどなら、今日まで泣いて暮し

はせぬ。廿歳を越しても齒を染めぬ姉の覺悟を何と見た。姉弟が心を
 一つにして、馬盗人の仇の奴めを……。

子之介。もし。(聲高しと制する。)

おみの。そなたは疾うからこゝに住み込んで、屋敷の案内も知つて居やら
 う。今夜にも姉を手引して……。これ、黙つてゐるは不承知か、但し
 は今更怯れが出たか。

子之介。昔の罪を後悔して、毎月二日を命日に、佛事供養を缺さず營んで
 下さる殿様を、今更執念く恨むのは……。もし、姉様。父様の死んだ
 は是非もない災難ぢやと……。

おみの。何。(屹となる。)

子之介。どうぞ諦めて下さりませ。

(おみのは呆れたる體にて弟の顔をじつと眺めてゐたりしが、やがてわつと地に泣き伏す。)

子之介。もし、姉様。(立寄つて取鑑る。)

おみの。(狂ふが如くに突き退け。) えい、寄るな、寄るな。現在親の仇を眼の前に置きながら、おめく〜と見てゐるやうな不孝者に、姉と呼べる、覚えはない。

子之介。たとひ佐々木殿を討つたとて、死んだ父様が返りませうか。由ない罪を作らうよりも……。

おみの。えい、卑怯者……不孝者……。もう此上はそなたは頼まぬ。何の相手が武士ぢやとて怖しいことがあらうか、仇は妾一人で見事に討つて見せう。

(おみのは抱えたる糸桶を解きて、山刀を取出す。子之介驚きて押へんとす。)

おみの。(振拂ひて。) えい、邪魔するな。放しや、放しや。

(突退けて奥へ駆け行かんとするを、子之介は慌てゝ遮る。)

子之介。いかにお急ぎなされても、女一人で奥へ踏み込まうなどは狂気の沙汰……。若し仕損じたら何となさる。まあ、お待ちなされませ。

おみの。止めるな、放しや。

子之介。でも、此まゝに遣ふことは……。

(おみのは又振切つて行かんとするを、子之介は必死となりて鎧り止め、無理に既のかげへ連込む。下の方より佐々木小太郎定重、花やかなる鎧を着けて弓を持ち、家來數人を引連れて出づ。)

定重。(家來を見かへりて。) 先刻の様子では、叔父上にも未だ御仕度はなされませ。それがし參つてお勧め申す間、其方共はこれに控へて居れ。

家來。はッ。

(定重は奥へ行かんとする時、奥より佐々木高綱は頭髻を切りたる有髪の僧形。直垂の袴を括りて脛巾を穿きたる旅姿にて笠を持ち出づ。後より薄衣、與一、六郎、小冬等四人は打濁れて送り出づ。)

定重。(駭く。)や、叔父上には……。

高綱。弓矢は折つた。太刀も捨てた。熊谷蓮生坊の二の舞ぢや。(笑ふ。)

定重。これは又思ひも寄らぬこと、佐々木四郎高綱と日本中に聞えたる

弓取が、俄に浮世を捨てられたは……。

高綱。戀しい浮世ならば何で捨てよう。偽り者が上に立つ世の中、倭ひ武士が跋扈る世の中、濁れた世の中、面白からぬ世の中、此のやうな世の中は高綱の住むべき所でない。

定重。では、この世の中を見限つて。

高綱。(罵るやうに。)あゝ、此の世の中に愛想が竭きわた。

薄衣。幾たびお止め申しても、お聞き入れがないばかりか、高野の聖の

お伴して、これから直にお立ちとは、情ないことでござります。

定重。これから直に高野へ山入りとな。

與一。折も折とて高野の聖が、こゝへ御立寄りなされたので、俄に出家

の御思召、まことに夢のやうに思はれます。

六郎。左なきだに世の中が面白からぬと仰せられてゐた處へ恰も將軍の御上洛、その御出迎ひを強らるゝ蒼蠅さに、寧ろ武士を捨つるとのお詞でござります。

高綱。委細は今聞く通りぢや。必ず騒ぐな、驚くな。兄上に逢ふたなら

ば其の趣を確と申傳へて呉りやれ。

(定重茫然。奥より智山出づ。)

智山。 方々の驚きも嘆きも道理ぢや。われ等も一應は頭を傾けたが、勇猛直前は勇士の本意、たとへば風を剪つて飛ぶ矢の如くで、おのれが向はんとする處へ向ふより他はござるまい。(風の音して梅の花散る。)

高綱。(打笑む。) 西行のやうな涙脆い男なら、無常を感じて泣くでござらう、

智山。 おん身の悟は……。

高綱。 高綱に悟はござらぬ。

定重。 悟らずして世を捨てらるゝは……。

高綱。 こんな世の中にうろくしてゐるのが、忌々しいからぢや。

智山。 それも一種の悟であらうよ。は……。

高綱。 は……。(既に向ひて。) 生月をこれへ牽け。

(子之介は生月を牽いて出づ。)

子之介。 殿様。委細はあれで伺ひました。

高綱。 聞いたとあらば重ねて云ふまい。これより聖の御伴して、高野へまゐる。頭を剃り毀てば高綱も法師ぢや。其方が父紀之介の後生安樂を禱るであらうぞ。

子之介。 ありがたうござりまする。(馬の口を取る。) さあ、お召しなされませ。

高綱。 いや、今からは聖の御弟子ぢや。(智山に對ひ。) 師の御坊には鞍に

召しませ。我等が車匿童子となり申さう。

智山。 鎌倉の將軍にも頭を下げぬ佐々木殿が瘦法師の馬の口を取らるゝ

か。さりとは面白い。然らば御免。(馬に乗る。)

(高綱は馬の口を取りて行かんとす。薄衣、小冬、與一、六郎、左右より走せ寄り無言にて袂に縫る。)

高綱。(左右を顧り。) 薄衣は小太郎と結髪の仲ぢや。やがては祝言して睦し

う暮せ。與一其他にも堅固であれ。やあ小太郎。

定重。はッ。(進み寄る。)

高綱。高綱一家の跡を頼むぞ。

定重。委細承知 仕りました。

高綱。可。(取られし袂を振切つて。)さらば……。

(行かんとする時。厩のかげよりおみのは山刀を抜き持ちて走り出づ。)

おみの。父様の仇……。(切つて蒐る。)

高綱。(身をかはして其手を捉へ) 誰ぢや。(顔を見て) あゝ、子之介の姉か。(微笑みながら突き放す。おみの倒れる。) こゝにも悟れぬ人がある喃。

智山。冬の日の暮れぬ中に大津の宿まで……。

高綱。はッ。

(高綱は馬の口を取りて行く。皆々後を見送る。おみのは又起ち上りて行かんとするを、子之介は抱き止める。三井寺の鐘の音開ゆ。)

—幕—

終

岡本綺堂著

小村雪岱裝幀

定價九十錢
送料八錢

新刊 國の秋

一 内容 一
 兩國の秋 雨月物語 刺物師の物語 子供の物語 雨邊山心 鳥邊山心 番町皿屋敷

徳川末の華やかな時代を背景にして、蛇使の女太夫と旗本の次男との戀を描き出したのが兩國の秋である。此作が本書中の雄作であり且氏として代表的の作品であらうと思ふ。鳥邊山心中は明治初春狂言に演ぜられて大喝采を博せるもの、雨月物語と云ひ、子供役者の死と云ひ皆傑出した作である、是等を纏めて一冊とせる本書の價値を認めて頂きたい。

鮪崎英朋著

泉鏡花小唄入
柳川春葉序

泉鏡花著 小村雪岱裝

三朋うた次女

定價壹圓五十錢 送料八錢

再版 皇の歌無復

定價九拾五錢 送料六錢

發兌 東京電話 神田區錦町三番六 和平出版社 振替口座 七八七